

ご入学を祝して

入学生の皆様、ご入学おめでとうございます。ご家族の皆様には、本日は誠におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

鶴見大学文学部は1963（昭和38）年に、鶴見女子大学文学部として、日本文学科・英米文学科の2学科体制で発足いたしました。その後、英米文学科は英語英米文学科に改称し、1998（平成10）年には文化財学科を、2004（平成16）年にはドキュメンテーション学科を開設して、大きく発展して参りました。おかげさまで本年創設60周年の節目を迎えます。

鶴見大学初代文学部長の久松潜一（学士院賞、文化功労者）は、国文学の研究全般を広く手がけましたが、私の専門でもあります上代文学に関しては特に多くの著述を残しています。千支の一巡したこの令和5年の春に、文学部長・文学研究科長として新入生の皆様と共に新たな歴史の一步を踏み出せますことを、大変光栄に、うれしく思っております。さて、60年前の学部開設当時とは異なり、現在は家に居ながらにして最新の情報にアクセスできる時代です。こうした時代においてなお、大学で学ぶことにどのような意味があるのでしょうか。現代は多様性の時代であり、真の意味で他者を理解し、尊重することが求められています。しかしながら、生まれ育った環境とそこで育まれた価値観の外側から物事を見ることは容易ではありません。知らず知らずに凝り固まった自分の価値観から脱却するためには訓練が必要です。

文学部の学び——具体的には、古い書物や文化財にふれて昔の人の考えと向き合うと共に未来に継承する手立てを考えること、我々の母語以外の言葉を用いる人の叙述を通して思想や信条を理解すること、コンピュータの理解できる言語を用いてプログラムを書き様々な可能性を想定して修正を加えること、図書館利用者の立場に立って情報を分類しアクセスしやすいよう工夫すること等々——は、他者の視点に立つことを必要とするという点で共通します。このような具体的な学問実践を通じて、自分の外側に視座を持つことに慣れ、そこから見える風景とこれまで有していた自身の視野との間を往還するうちに、固定的であった価値観が揺さぶられ、次第に多様な視点から柔軟にものごとを見つめることができるようになります。そうした経験は、他者理解に留まらず、自分自身、また社会全体を見つめ直し理解することに繋がるはずです。「私とは何者か、我々はどこに向かっていくのか、行くべきなのか」。そのような問いに向き合える力が「知」であり、実証に基づく実践を通じての、それへの飽くなき探究こそが大学教育の根幹であり使命であると考えます。

では、「知」を獲得するには、具体的に何をすればいいのか。『管子』（春秋時代の齊の名宰・管仲が著したとされる中国の思想書）は、「智か、智か。これを海の外に投じて自ら奪るなかれ。これを求むるものは、これに居るを得ず」（智を求めるのであれば、それに執心してはならない）として、そうしたものを一旦心の外側に措いて、心を虚無にすること（＝道）の重要性を説いています。学長の祝辞にあります本学の建学の精神にも通じる考え方です。

入学式を迎えた今日この日のやる気と緊張は、世の常ながら移ろいやすく、日常普段の学生生活においては、「文学部や研究科における個別具体的な学びや課題が、実社会において何の役に立つのか」という疑問が頭をもたげることもあるでしょう。その時には、そうした気持ちを一旦海の外に投じて、ひたすらにその学びや課題に向き合い、「課程を修了した際には抽象的な言葉で表されるような大きな何か（例えば上述の「知」のようなもの）が得られるかもしれない」と信じて一歩ずつ前に進もうではありませんか。鶴見大学のディプロマポリシーの筆頭に置かれた「ものごとを多面的に捉え、深い洞察により世界と自分の関係を正しく認識することができる」との文言は、単なる美辞麗句の羅列でなく、こうした理念の具現として、皆さんの進むべき道を照らしています。

4年間、また大学院生においては2年間乃至3年間、多様な言説に目を向け、様々な経験を通して他者の、また自身の心と向き合って下さい。教員は先達としてその手段を伝えられるよう、それぞれの分野の研究に励んで参りました。教室で皆さんにお会いできることを心から楽しみにしております。

令和5年4月5日

文学研究科長・文学部長 新沢 典子